

小林 俊行

数学は普遍的な真理を追究する学問である。現代の純粹数学のカルチャーは真理に対して頑なまでに謙虚である。あいまいな解釈を許さない厳密な定義を土台とし、ごまかしのない論理を積み上げて証明を行う。このようにしてひとつひとつ証明された数学の定理が示す真理は、時を経ても場所が変わっても不変である。さらに、膨大な思考の蓄積と、数々の天才によるひらめきと芸術性が結びつくことによって、人類による数学の理論は飛躍的に発展してきた。

さて、大正十三年創刊のJJMは、昭和の大戦の間も途絶えることなく出版されてきた数学の欧文ジャーナルとして日本最古のものである。ところが、平成の平和な時代に廃刊の危機が襲った。グローバル化・電子化の激流の中で数学のジャーナルも弱肉強食の時代になり、

JJMの国際的な地位は低下の一途を辿ったのである。海外の図書館が次々と旧JJMの購読を打ち切り、出版社は2004年に撤退を通告した。

JJMの緊急事態に、このジャーナルの編集と無関係だった私に白羽の矢が立てられ、一か八かの建て直しを頼まれた。再建のスキームづくりにあたって、私はJJMの無形の価値を検討し、「当たり前すぎて普段は意識しない大事な物」を失わないこと、それ以外は大胆に変えることの2点を重視した。

新しいコンセプトは「創造につながる研究総説」である。単なる総説論文ではない。「新しい数学理論」に独自の分析や視点を盛り込んだ総説論文には、質の高い発展を生み出す原動力がある。それを出版して数学の発展に役立てればと考えた。オリジナルなもの、美しいものを尊重して日本から良いものを発信しようという魂を、JJMの基本精神と定

めた。この精神を忘れないよう、J.J.M.の3文字で富士山をかたどったロゴのデザインも私自身で行った。多くの方々の善意と友情に支えられ、JJMは2006年に生まれ変わることができた。

JJMの再生から5年経った今、論文投稿の9割以上は国外からであり、トムソン・ロイターズは世界の数学の277対象誌中、JJMが12位であると発表した(5年インパクト・ファクター)。この順位は、学術的な質というよりも、単に国際的影響力に対する表層的な指標の一つと捉えるべきであるが、廃刊の危機を脱してここまで来られたことは素直に喜ぶたい。学術誌は長い年月をかけて信頼が醸成されるものである。JJMの高い理想の実現のためには、さらに地道な努力が必要と考えている。

(こばやし・としゆき 東京大学教授・

Japanese Journal of Mathematics 編集長)

Japanese Journal of Mathematics

1st series(1924-1974) 2nd series(1975-2005)を

経て、3rd seriesは2005年創刊 年2回

日本数学会・Springer Japan

ISSN0289-2316 (Print) 1861-3624 (Online)